

事業の名称

茨城町ほっとステーション活動報告

〔事業責任者〕

(自治体等側)

茨城町教育委員会 教育長 矢口 和美

(大学側)

茨城大学教育学研究科 教授 渡部 玲二郎

地域の教育力向上

連携先

茨城町教育委員会，茨城町適応指導教室とんぼのひろば

プロジェクト参加者

主たる参加者・計画立案者を以下に挙げる。

矢口和美（茨城町教育委員会 教育長），磯野宏人（茨城町教育委員会指導室長），稲野辺秀久（茨城町教育委員会室長補佐），小林伸朗（茨城町教育委員会指導主事），小林博（社会教育主事），寺山勝衛（教育支援センター長），学生ボランティア（茨城大学教育学研究科教育実践高度化専攻院生・茨城大学教育学部学生等），渡部玲二郎（茨城大学教育学研究科 教授）

プロジェクトの実施概要

①本プロジェクトの目的

茨城大学や水戸教育事務所と連携し，以下2つを目的として本事業の推進を図る。

第一に，適応指導教室に通う児童生徒・保護者の心の安定を図ることである。この目的達成のために，1) 指導員の専門性の向上のために大学の協力を得ること，2) 学生・院生ボランティアの協力を得て，様々な児童生徒に寄り添う支援体制を整えること，3) 地域との連携強化を図ることが必要である。

町単独で実施が難しいこれらの取組を，茨城大学や水戸教育事務所と連携を進め，実現を図る。

第二に，保護者・教師の心の醸成である。不安定な児童生徒を支える身近な存在である保護者・

教師が，しっかり子どもの変化を捉え支えられることが重要と考える。そこで学校単位で，学校の実態・地域の特性に合わせて心の醸成を図るプログラムを実施する。

②連携の方法

適応指導教室及び各学校単位で必要とする援助を，町がとりまとめ，大学と連絡を取り合えるようにする。

町では指導主事がコーディネーターとなって大学の担当者と連携を図り，スムーズに活動が行われるようにする。

また，町指導主事は適応指導教室や各学校で何を求めているか，何が必要かの相談・支援を行い効果的な活動が図れるようにする。

③活動計画

茨城大学と水戸教育事務所の助言を受け，以下の活動を実施する。

＜茨城町適応指導教室とんぼのひろばプログラム＞

茨城町適応指導教室とんぼのひろばでは，以下の3つの点を実施する。

- 1) とんぼのひろばが計画する野外活動プランを，学生・院生ボランティアの協力を得て実施する。年2回実施予定。
- 2) 学生・院生ボランティアの協力を得て，とんぼのひろばに通級する児童生徒の支援体制を強化する。
- 3) 町指導室・とんぼのひろばで連携し，児童生徒の支援方法について研修を行う。年2回実施

予定。

<学校・保護者用プログラム>

不登校未然防止を目的として、保護者対象に子育て支援、子供との接し方、また教職員対象に学級経営、生徒指導の在り方等について、町内の小・中学校での講演会を開く。各校1回は実施する。

④期待される効果

- 1) 野外活動は閉ざされた空間から脱却し、日常で味わえない体験を行うことができる。自然に触れ、多くの人たちと協力して活動することで、子供の自主性・自立心を育み、自尊感情を芽生えさせることが期待される。また年が近い学生・院生ボランティアと一緒に活動することで、さらに視野を広げ考えることができると考えられる。
- 2) 上記同様、年齢が近い学生・院生ボランティアに支援を継続的に受けることで、相互の信頼関係を深めることができ、子供たちの精神的安定を図ることが期待される。また学生・院生においても教育力の向上に役立てられると考える。
- 3) 茨城町適応指導教室とんぼのひろばの支援員及び町内の支援担当教員が、大学の協力を得て、専門的な知識・技能を学ぶことで子供たちにより有効な支援が行われることが期待される。
- 4) 地域における学校教育に関わる行政的会議の設置に大学が協力・支援することにより、地域と大学の協力関係が一層深まるとともに、地域の教育力の向上に寄与することができる。

プロジェクトの実施成果

①活動実績

具体的な活動実績は、以下のとおり。

<茨城町適応指導教室とんぼのひろばプログラム>

- 1) 「さつまいも掘り体験・おしゃべりバーベキュー」2017年10月18日（水）実施
参加者：茨城町教育長、茨城町教育委員会指導主事、茨城町適応指導教室職員、とんぼのひろば通所中の児童生徒と保護者、茨城大学教職大学院院生、地域住民

内容：茨城町適応指導教室とんぼのひろばが企画し、野外活動プラン（自然体験活動）を行った。地域住民の協力を得て、さつまいも掘り体験を行った後、収穫したイモや各自持ち寄った野菜などを使いバーベキューを行った。普段は適応指導教室でおとなしい生徒が生き生きとイモ掘りに参加する姿が見られた。またバーベキューでは、子供たち同士が会話を通して調理する姿も見られた。参加者は総勢15名となり、にぎやかに活動を行う事ができた。



2) 院生ボランティアによる支援活動

10月より院生の協力を得て、毎週1回学習や生活面の支援を行ってもらった。通級者は中学3年生がほとんどのため、受験指導を始め、進学についての悩み相談など様々な形でサポートを得ることができた。また院生の目から見た通級者の変化などの情報を基に、個々の指導をより適切に行うことができた。

3) 適応指導教室連絡協議会（不登校対策協議会） 2017年7月31日（月）

参加者：適応指導教室職員、町内小中学校教職員、茨城町教育委員会指導主事

内容：茨城町教育委員会が企画し、茨城大学教育学部教授 渡部玲二郎先生を講師としてお招きし、「援助を必要とする子供を理解する際の注意点とは」を講演題として研修を実施した。それぞれの立場（管理職、生徒指導主事、養護教諭、相談員）で今後に生かし、実践すべきことは何かを学んだ。



<学校・保護者用プログラム>

1) 家庭教育講演会

参加者：茨城町立小学校・中学校（教員・児童生徒・保護者）、招待講師

内容：不登校予防を主題として、子育て支援、学級経営、子どもとの接し方、生徒指導の在り方等について、茨城町小・中学校での講演会を開いた。2017年10月30日「親子の係わりについて」（葵小学校4年、保護者80名・児童84名）、11月29日「今必要な家庭教育の在り方」（長岡小学校、保護者87名参加）、同日「思春期を迎える前に（子育てのヒント）」（大戸小学校、保護者52名）、11月30日「生きるって何だ！～中学2年生からのチャレンジ～」（青葉中学校2年、保護者98名・生徒102名）、同日「生きるチカラって何だ！～これからを生きる子供たちのために～」（明光中学校、保護者60名、生徒153名）、12月1日「子供に愛情を注ぐという事」（青葉小学校、保護者72名）の6つのプログラムを行った。

②プロジェクトの達成状況

活動実績の報告のとおり、活動計画はほぼ実行することができた。前述の期待される効果にそって達成状況をまとめ、報告する。

1) 大学の協力を得て行われた茨城町適応指導教室とんぼのひろばの野外活動は、参加した児童生徒及び保護者からの評価は良好であった。児童生徒からは、「さつまイモが多くとれて楽しかった」、「イモができるまでの工夫がわかった」、「バーベキューで〇〇君と話をして、意外な面があることが分かった」「一人で活動していたら〇〇さんが声をかけ手伝ってくれた。嬉しかった」「今まで火を使った活動をしたことがなかったので、自信がもてた」という感想があった。

今回のプログラムは子供たちの自主性・自立心を育み、自尊感情を芽生えさせることができたと言える。また様々な人との触れ合いで、視野を広げることもできたと考えている。今回のプログラムの後、適応指導教室での子供達の雰

囲気が大きく変わった。

保護者からは「子供がとても喜んでいて、
「(報告を聞いて)家では見られない様子を聞く
ことができよかった」、「多くの子と交流が持
てて良かった」といった反応が返ってきており、
親子だけの社会から広がりのある社会への変化
を感じとることができたと考えられる。

- 2) 教育学研究科教育実践高度化専攻(教職大学院)の実習授業(適応指導教室実習)の一環としてこれらのプログラムに参加、協力して実施した。子供たちは毎週水曜の院生の交流を楽しみにするとともに、様々な話をする姿が見られるようになった。また、実習授業のまとめとしての事例報告会を、現場教員の参加を得ながら行い、実習生の指導力向上に寄与するとともに、職員・教員の指導力向上にも大変役立った。町の教育力向上と大学の連携が行われたと考えることができる。
- 3) 昨年度に引き続き実施された適応指導教室連絡協議会は、行政的に明確に位置付ける方向性を示すことができた。地域の中の不登校で苦しむ児童生徒や保護者への援助を行うために、大学からの専門知識・技術の協力を得られたことで、不登校対策の側面的援助の可能性を見出すことができた。今後も大学の協力を得て、協議会を続けていきたい。
- 4) 学校・保護者プログラムによる講演会事業では、教員や保護者を中心として、児童生徒に対し不登校予防のための取り組みができた。学校教育にとどまらず、社会教育の観点からの取り組みと学校教育における取り組みを融合させた講演を行ったことで、教員・保護者には新たな見方・考え方を伝えることができたと考えられる。
- 5) 費用対効果の視点で見ると、野外活動への参加人数は決して多くはないが、活動に直接参加していない周囲の人々にも影響を与えるなど、その効果は非常に高い。講演会では各校非常に評判がよく、また多くの教員・保護者が参加しており、費用対効果としては十分な成果を上げ

たとえられる。

③今後の計画と課題

- 1) まず、第一に不登校の児童生徒、およびその保護者たちの不安や心配に対してできるだけ有効なプログラムを計画・実施していく必要がある。児童生徒や保護者からの活動プランに対する感想を聞くと、一番重要なものは児童生徒一人一人に応じたプログラムを設定する必要性を感じる。そのようなプログラムが安定して児童生徒に供給されれば安心感をもって日々過ごすことができ、次への一步を踏み出すことができると考える。
- 2) 第二に不登校の児童生徒を生まない社会的環境・家庭環境を育む必要がある。これまでは不登校になった児童生徒の支援を中心に企画してきたが、何よりも新たな不登校の児童生徒が出ない環境づくりが望まれる。そのため家庭・社会と連携を図り不登校児童生徒ゼロを目指していく。
- 3) 茨城大学との連携強化が上げられる。今まで、学校・町だけの取り組みでは不十分な点が多々見られた。その中で、茨城大学の協力で研修会、講演会、そして院生の協力は非常に大きな支えとなった。今後も専門機関の協力を得て、地域力・家庭力そして学校の力を育んでいきたい。